

2021年11月6日（土）

令和3年度 弘前大学教育学部附属四校園

第1回合同公開研究会（オンライン）

ポスト・コロナの学校と学びのあり方を考える — 「主体的・対話的で深い学び」と「個別最適な学び」をどうつなぐか —

石井英真（京都大学）

自己紹介

- 専門は教育方法学（学力研究）＝学校ですべきこと、できることについて原理的・実践的に探究（教育的価値論）
- 授業という営みへのこだわり＝ブルームの目標分類学と斎藤喜博の教育美学との間（教育技術論）
- 専門医であると同時に町医者でありたい＝授業改善を軸にした学校改善の取り組み（学校改革実践）

【主な著書】

- 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。
- 石井英真『中教審「答申」を読み解く』日本標準、2017年。
- 石井英真『増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2020年。
- 石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。
- 石井英真『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン』日本標準、2020年。
- 石井英真監修・太田洋子・山下貴志編著『中学校「荒れ」克服10の戦略—本丸は授業改革にあった！』学事出版、2015年。
- 石井英真編『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業』日本標準、2017年。
- 石井英真編『アクティブ・ラーニングを超えていく「研究する」教師を育てる』日本標準、2017年。
- 石井英真編『授業改善8つのアクション』東洋館出版社、2018年。
- 石井英真・熊本大学教育学部附属小学校『粘り強くともに学ぶ子どもを育てる』明治図書、2020年。
- 石井英真「教師に求められる学びとは—教師による教師の成長のための実践研究」大阪府教育センター『高等学校における校内授業実践研究 進め方ガイドブック』2020年。（http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/pdf/kounaijyugyoujissenkennkyuu_ver_3_r2.pdf）
- 石井英真監修・長瀬拓也・秋山貴俊編『ゼロから学べるオンライン学習』明治図書、2020年。
- 石井英真編『小学校 新教科書ここが変わった 算数』日本標準、2020年。
- 石井英真編著『流行に踊る日本の教育』東洋館出版社、2021年。
- 石井英真・鈴木秀幸編著『ヤマ場をおさえる学習評価（小学校編・中学校編）』図書文化、2021年。
- 石井英真監修・宍戸寛昌・長瀬拓也編『失敗から学ぶ』東洋館出版社、2021年。
- 石井英真編著『高等学校 真正（ホンモノ）の学び 授業の深み（仮）』学事出版、近刊 など

現代アメリカにおける
学力形成論の展開 **再増補版**

スタンダードに基づくカリキュラムの設計

Development of theories on educational objectives and assessment
in the United States:
Designing standards-based curriculum

石井 英真

Go! Task Structure ArtsTechnology Assessment

授業づくりの
深め方

「よい授業」をデザインするための5つのツボ

石井英真 著

ミナジブ/共創

未来の学校

ポスト・コロナの公教育のリデザイン

教育機能や保護機能等において「大きな学校」を追求すること。公共性と公平性の実現のためにふんばること。委縮と不信の連鎖から挑戦と信頼の連鎖へ――

苦境に立ってきた公立学校こそ、「眠れる獅子」の
ような可能性を
秘めている! (本書より)

石井英真

日本図書

流行に踊る

本当に大切なことは、私たちの足元にある!

教育の界と社会の両方、皆で改革しようとするの、後行のうらみ〜それは、教師の背中を後押しし、子ども成長できる学びを生み出すための?

日本の教育

石井英真、渡辺貴裕、藤本和久、赤木和重、川地亜弥子、藤本和久、山下晃一、杉田浩崇、木村拓也、直理陽一、熊井将太、石井英真

東洋館出版社

場をおぼえる
学習評価

深い学びを促す 指導と評価の一体化 入門

小学校

石井英真 著
鈴木秀幸 監

国立教育政策研究所
教育課程研究センター
研究報告
「内閣府よりここの評価結果を」を収録

学びの舞台づくりで評価が変わる!

1. 見取り・評価・評定を区別する
2. 単元の根となる学習課題をつくる
3. 指導と評価場面が一体的な単元計画をつくる

シンプルな観点別評価で、
学習改善・指導改善へ!

図書文化

これからの教師のための思考法

学から失敗

せきららなエピソードで学ぶ、失敗との向き合い方

教師の失敗を分析した教育実践書!

理論 ▶ 事例 ▶ 解説から徹底的に分析! *****

石井英真、長瀬拓也、松井恵子、丸岡慎弥、種田哲也、樋口綾香、万本太

GIGAスクール構想の実現パッケージ

～令和の時代のスタンダードな学校へ～

令和元年12月19日

1. 環境整備の標準仕様例示と調達改革

- 「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策」の考え方に基づく、**学習者用端末の標準仕様**を例示
 - 「GIGAスクール構想」に基づく、高速回線に向けた**校内LAN整備の標準仕様**を例示
 - 容易に大規模な調達が行えるよう、標準仕様書を基に**都道府県レベルでの共同調達**を推進
- **学校ICT環境の整備調達をより容易に**

2. クラウド活用前提のセキュリティガイドライン公表

各教育委員会・学校が情報セキュリティポリシーの作成や見直しを行う際の参考とする、『**教育情報セキュリティポリシーに関するガイドライン**』（平成29年策定）を、**クラウド・バイ・デフォルト**の原則を踏まえて改訂

- 整備の硬直化を避けるための位置づけや構成の見直し
 - クラウド・バイ・デフォルトの原則追記
 - クラウドサービス事業者が留意すべき事項の追加
- **クラウド活用により使いやすい環境へ**

3. 学校ICT利活用ノウハウ集公表

教師や学校、教育委員会等が、情報教育やICTを活用した指導、ICT環境整備等を行う際に参考となる様々な情報をまとめた「**教育の情報化に関する手引**」を公表。特に「第4章 教科等の指導におけるICTの活用」においては、ICTを効果的に活用した学習場面の10の分類例を示すとともに、

- 小学校、中学校、高等学校については各学校段階における各教科等ごとに
 - 特別支援教育については学習上の困難・障害種別ごとに**ICTを活用した効果的な学習活動の例を提示**。
- **全ての教職員がすぐに使えるように**

4. 関係省庁の施策との連携

- 総務省：教育現場の課題解決に向けた**ローカル5Gの活用モデル構築**
 - 経済産業省：**EdTech導入実証事業**、**学びと社会の連携促進事業**
- **ローカル5Gや教育コンテンツも活用して未来の学びを実現**

5. 民間企業等からの支援協力募集

将来のICT社会を創造し、生きていく子供達に向けた社会貢献として、**民間企業等から学校ICT導入・利活用に対するあらゆる協力を募る**。

- 校内LANなど通信環境の無償提供
 - 新品、中古問わず十分なスペックの端末の学習者への提供
 - ICT支援員として学校の利活用の人的サポート等
- 公表し、文部科学省から教育委員会へ随時繋いでいく

- **民間等の外部支援により導入・利活用加速**

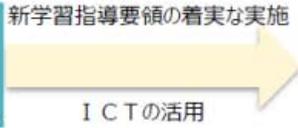
「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)【概要】

第I部 総論

令和3年1月26日
中央教育審議会

1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

- 社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来
- 新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」



一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

2. 日本型学校教育の成り立ちと成果、直面する課題と新たな動きについて

成果

- 学校が学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、児童生徒の状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子どもたちの知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」は、諸外国から高い評価
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、全国的に学校の臨時休業措置が取られたことにより再認識された学校の役割
①学習機会と学力の保障 ②全人的な発達・成長の保障 ③身体的、精神的な健康の保障（安全・安心につながる可以保证の居場所・セーフティネット）

課題

- 子どもたちの意欲・関心・学習習慣等や、高い意欲や能力をもった教師やそれを支える職員の力により成果を挙げる一方、変化する社会の中で以下の課題に直面
- 本来であれば家庭や地域でなすべきことまでが学校に委ねられることになり、結果として学校及び教師が担うべき業務の範囲が拡大され、その負担が増大
 - 子どもたちの多様化（特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒等の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校児童生徒数の増加等）
 - 生徒の学習意欲の低下
 - 教師の長時間勤務による疲弊や教員採用倍率の低下、教師不足の深刻化
 - 学習場面におけるデジタルデバイスの使用が低調であるなど、加速度的に進展する情報化への対応の遅れ
 - 少子高齢化、人口減少による学校教育の維持とその質の保証に向けた取組の必要性
 - 新型コロナウイルス感染症の感染防止策と学校教育活動の両立、今後起こり得る新たな感染症への備えとしての教室環境や指導体制等の整備



必要な改革を躊躇なく進めることで、従来の日本型学校教育を発展させ、「令和の日本型学校教育」を実現

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

① 個別最適な学び（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）

- ◆ 新学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要
- ◆ GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
- ◆ その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

- 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、
・支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

- 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

- ◆ 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる
- ◆ その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

それぞれの学びを一体的に充実し 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

② 協働的な学び

- ◆ 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要
- ◆ 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出す
- 知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる
- 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

「個別最適な学び」をめぐる論点

- 個別化（量的差異・垂直的価値）／個性化（質的差異・水平的価値）

c. f. 中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」にある「指導の個別化」と「学習の個性化」の対比は、教えることと学ぶことという別の軸が付け加わっていて、本質的な論点が見えにくくなっている。

- 目標の個別最適／方法の個別最適
- 従属的主体（選ばされる）／自律的・自治的主体（選ぶ・見出す・決める）
- 個人主義（人それぞれ・点）／公共社会（自立した個による対話と協働とインクルーシブな空間・ネットワーク）／集団主義（みんなで一斉に・面）



学びの個別化と個性化

	個別化	個性化
基本的な方向性	<p>教育内容や学習進度や進級水準の能力に応じた多様化</p> <p>「指導の個別化」（子どもの個性（適性）に応じて学習方法の最適化を図ることで、教科の学習内容の中で習得させたい知識・技能の確実な定着をめざす）</p>	<p>ひとりひとり（individual）の内的なニーズや自発性に応じた多様化</p> <p>「学習の個性化」（子どもの興味・関心を生かしながら、教科の目標に迫るような思考・判断や認識を深めたり、社会の中で自己を活かせるような「生きる力」を高め、個性を育てたりしようとする）</p>
個人差の捉え方	学習にかかる時間の差（量的差異）	興味・関心や学習スタイルなどの差（質的差異）
教育形態・システムレベル	<p>既存の内容パッケージの量や水準の違い</p> <p>能力別学級編成（同一性）、自由進度学習</p>	<p>その子に応じた内容自体の組み換え</p> <p>同年齢集団、異年齢集団等の多様な集団編成（複数性）、自由テーマ学習</p>
指導法レベル	学習進度や学習到達度に応じて個別指導を行う	その子に応じて教授法や学習活動や表現方法を工夫する
評価とカリキュラムのあり方	<p>知能や学業成績等の一元的尺度</p> <p>（量的に進める直線的）プログラム学習と目標標準拠評価</p>	<p>多重知能や個性（持ち味や強み）等の多元的尺度</p> <p>（質的に深める多面的な）プロジェクト学習と個人内評価</p>
発展学習の形態	早修（acceleration）（より早く進む）	拡充（enrichment）（より広く深く学ぶ）

学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「**社会に開かれた教育課程**」の実現

各学校における「**カリキュラム・マネジメント**」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の
新設など
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造
的に示す

学習内容の削減は行わない※

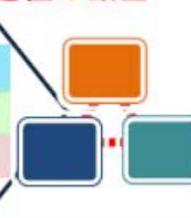
※高校教育については、些末な事実に基づく知識の増記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、
そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「**アクティブ・
ラーニング**」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習
得など、新しい時代に求
められる資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質
の高い理解を図るための
学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



文部科学省 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース「Society 5.0 に向けた人材育成 ～ 社会が変わる、学びが変わる ～」（平成 30 年 6 月 5 日）

1. Society 5.0の社会像・求められる人材像、学びの在り方

（Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会の議論を踏まえて）

Society 5.0の社会像

A I 技術の発達 ⇒定型的業務や数値的に表現可能な業務は、A I 技術により代替が可能に
⇒産業の変化、働き方の変化

日本の課題

A I に関する研究開発に人材が不足、少子高齢化、
つながりの希薄化、自然体験の機会の減少

人間の強み

現実世界を理解し意味づけできる感性、倫理観、
板挟みや想定外と向き合い調整する力、責任をもって遂行する力

Society 5.0における学びの在り方、求められる人材像

A I 等の先端技術が教育にもたらすもの ⇒**学びの在り方の変革**へ

（例）・スタディ・ログ等の把握・分析による学習計画や学習コンテンツの提示

・スタディ・ログ蓄積によって精度を高めた学習支援（学習状況に応じたコンテンツ提供、学習環境マッチング等）

学校が変わる。学びが変わる。 ⇒Society5.0における学校（「学び」の時代）へ

- ・一斉一律授業の学校 →読解力など基盤的な学力を確実に習得させつつ、個人の進度や能力、関心に応じた学びの場へ
- ・同一学年集団の学習 →同一学年に加え、学習到達度や学習課題等に応じた異年齢・異学年集団での協働学習の拡大
- ・学校の教室での学習 →大学、研究機関、企業、NPO、教育文化スポーツ施設等も活用した多様な学習プログラム

共通して求められる力：文章や情報を正確に読み解き対話する力

科学的に思考・吟味し活用する力

価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力

新たな社会を牽引する人材：技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材

技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材

様々な分野においてA I やデータの力を最大限活用し展開できる人材 等

3. Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト①

I. 「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供

○学習の個別最適化や異年齢・異学年など多様な協働学習のためのパイロット事業の展開 ※全国の小中高等学校で実施
(学校数は今後検討)

- 児童生徒一人一人の能力や適性に応じて個別最適化された学びの実現に向けて、スタディ・ログ等を蓄積した学びのポートフォリオ（後述）を活用しながら、個々人の学習傾向や活動状況（スポーツ、文化、特別活動、部活動、ボランティア等を含む）、各教科・単元の特質等を踏まえた実践的な研究・開発を行う。（例：基礎的読解力、数学的思考力の確実な習得のための個別最適化された学習）
- また、異年齢・異学年集団での協働学習（例：英語力に応じた異年齢・異学年の協働学習）についても、実践的な研究・開発を行う。
- 「チーム学校」を進める観点からも地域の人材等と連携し、体験活動を含めた多様な学習プログラムを提供する。
- 生徒・学生の学習環境がより個別最適化されるよう、アドバンスト・プレイスメント、飛び入学及び早期卒業等の活用促進を図る。また、学生の様々な学びの意欲を実現させ、学習の個別最適化を進める観点から、各大学におけるギャップイヤーや学外での幅広い学びのための休学の活用を促進する。

○スタディ・ログ等を蓄積した学びのポートフォリオの活用

- EdTechを活用し、個人の学習状況等のスタディ・ログを学びのポートフォリオとして電子化・蓄積し、指導と評価の一体化を加速するとともに、児童生徒が自ら活用できるようにする。そのため、CBTの導入を含めた全国学力・学習状況調査の改善、学びの基礎診断の円滑な導入により、個々の児童生徒について、基盤的学力や情報活用能力の習得状況の継続的な把握と迅速なフィードバックを可能とし、評価改善のサイクルを確立する。

○EdTechとビッグデータを活用した教育の質の向上、学習環境の整備充実

- EdTechとビッグデータの活用を推進するために必要なガイドラインの策定、データの収集、共有、活用のためのプラットフォームの構築に関する検討を行う。
- デジタル教科書、デジタル教材、CBT導入等を進める観点からもICT環境の整備やICT人材の育成・登用を加速する。

Society 5.0に向けた学校ver.3.0

Society 3.0
工業社会

Society 4.0
情報社会

Society 5.0
超スマート社会

- ・ 人間としての強み（現実世界を理解し状況に応じて意味付け、倫理観、板挟みや想定外と向き合う力、責任を持って遂行する力など）
- ・ 共通して求められるのは、文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力など

学校ver.1.0（「勉強」の時代）

◆教育のリソース（教師、教材、場所）を学校が独占し、**全員が決められた時間に一齐に授業を受け、知識再生型のペーパーテストで成果を測定。**

◆カリキュラムは知識の体系（典型が、国語の学年別漢字記当表）。

◆重視されたのは、知識を正確に記憶する**基礎学力、忍耐強さ、あらかじめ定められた計画を着実にこなす正確さ。**

◆教員の授業研究による**教育方法工夫・改善の自主的な蓄積に依存**

脱「勉強」

学校ver.2.0（「学習」の時代）

◆日本の学校教育の蓄積を活かしつつ、**能動的な学び手（アクティブ・ラーナー）を育成する「主体的・対話的で深い学び」。**

◆5肢択一偏重の大学入試から記述式を導入した**考える入試への転換など高大接続改革。**

◆カリキュラムは**能力重視の体系へと転換。**（語彙を表現に活かす、科学的に思考する、数学を日常生活に活かす...といった認知的能力とその土台となる学習意欲や協働しようとする態度を重視）

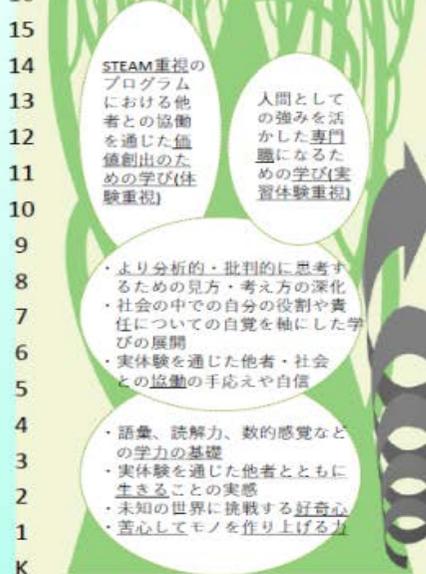
◆重視されているのは、**自分自身の文脈で情報を編集し、協働・対話を通じて新しい価値や「納得解」を生み出す力。**

学習指導要領2017年改訂

学校ver.3.0（「学び」の時代）

「K-12教育」から「K-16プログラム」へ

- ・ 次世代型学校においては、教育プログラムを個別最適化した「学び」へ
- ・ K-16のグレードは学年ではなく能力のレベル。人生100年時代のリカレント教育を前提とした教育の仕組みへ
- ・ K-16プログラムは、次世代型学校を軸に大学、NPO、企業など様々な主体がそれぞれの強みを活かして提供



「能動的な学び手」
(アクティブ・ラーナー)

「個別最適化された学びのまとめ役」
(ラーニング・オーガナイザー)
個々の子供の学びと授業における協働学習のデザインとプロデュース
(新たな公教育の役割)

個別最適化された学びと学びのポートフォリオ

- ◆公教育の重要な役割は、**子供の学びの状況を観察し、個々人に応じた学びの実現を支援**
- ◆次世代型学校を軸に、**大学、NPO、企業などが提供する様々なプログラムを選択して学ぶコヒキタス・ラーニング**(※)
- ◆学校は、**実体験や他者との対話・協働をはじめ多様な学習活動の機会を公正に提供する役割を重視**
- ◆個人の学習成果（作文、作品、レポート、プレゼン等）は**学びのポートフォリオとして電子化、蓄積**

個人の認知と性向の特性を踏まえた支援
(認知科学と教育ビッグデータの活用)
※ビッグデータのリスクや限界にも留意

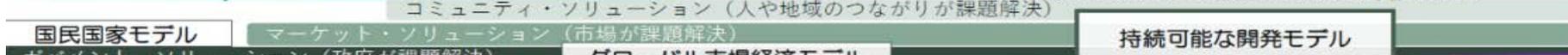
教育ビッグデータの収集・分析（総合的なエビデンス）
スタディ・ログ（学習の履歴）

自治体間や国との連携 研究機関・企業との連携

※コヒキタス・ラーニング：いつでもどこでも学習できること

ICT活用が卒「学校」、卒「教育」につながっているか？
中身をみると「勉強」の時代に戻ってはいないか？

脱学校？
卒学校？



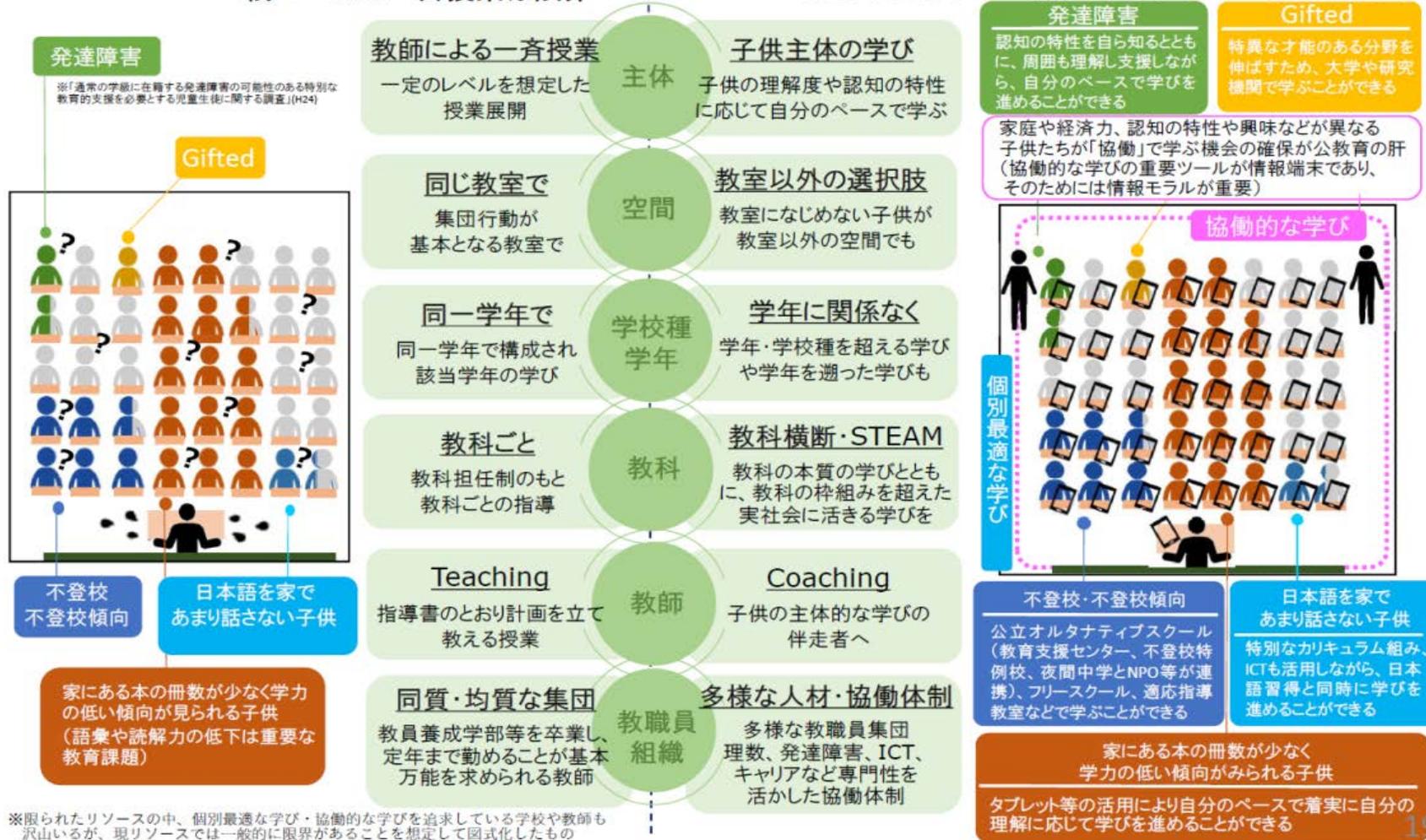
持続可能な開発モデル

人間存在としての基本的な価値や人格形成（善く生きるとは、個人と他者、社会との関わり方…）

子供にとっての「時間」の確保・再配分の目指す姿(たたき台)～中学校40人学級の教室にあてはめた場合～

子供たちが多様化する中で
紙ベースの一斉授業は限界

多様な子供たちに対してICTも活用し
個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実



※限られたリソースの中、個別最適な学び・協働的な学びを追求している学校や教師も沢山いるが、現リソースでは一般的に限界があることを想定して図式化したもの

内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局
『キックオフミーティングの議論を踏まえた論点整理～「時間」の確保・再配分について～(案)』(総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキング・グループ(第1回) 2021/9/16)

改革に踊り、揺れる「授業」 二項対立の裏で進む手法主義

- 「教え」から「学び」へ（教師主導から学習者主体へ）、さらには、「授業」から「学び」へ（学校から合校へ）？
- 「一斉授業」から「学び合い」へ、さらには、「個別最適化された学び」へ？ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の二項対立？
- ゆらぐ「授業」、進む手法主義（○○メソッドから○○アプリへ）

※「学び」の強調は「教えること」を照らし出し、個別化の強調は、集団での学びの意味を照らし出す→「授業」が問われる。

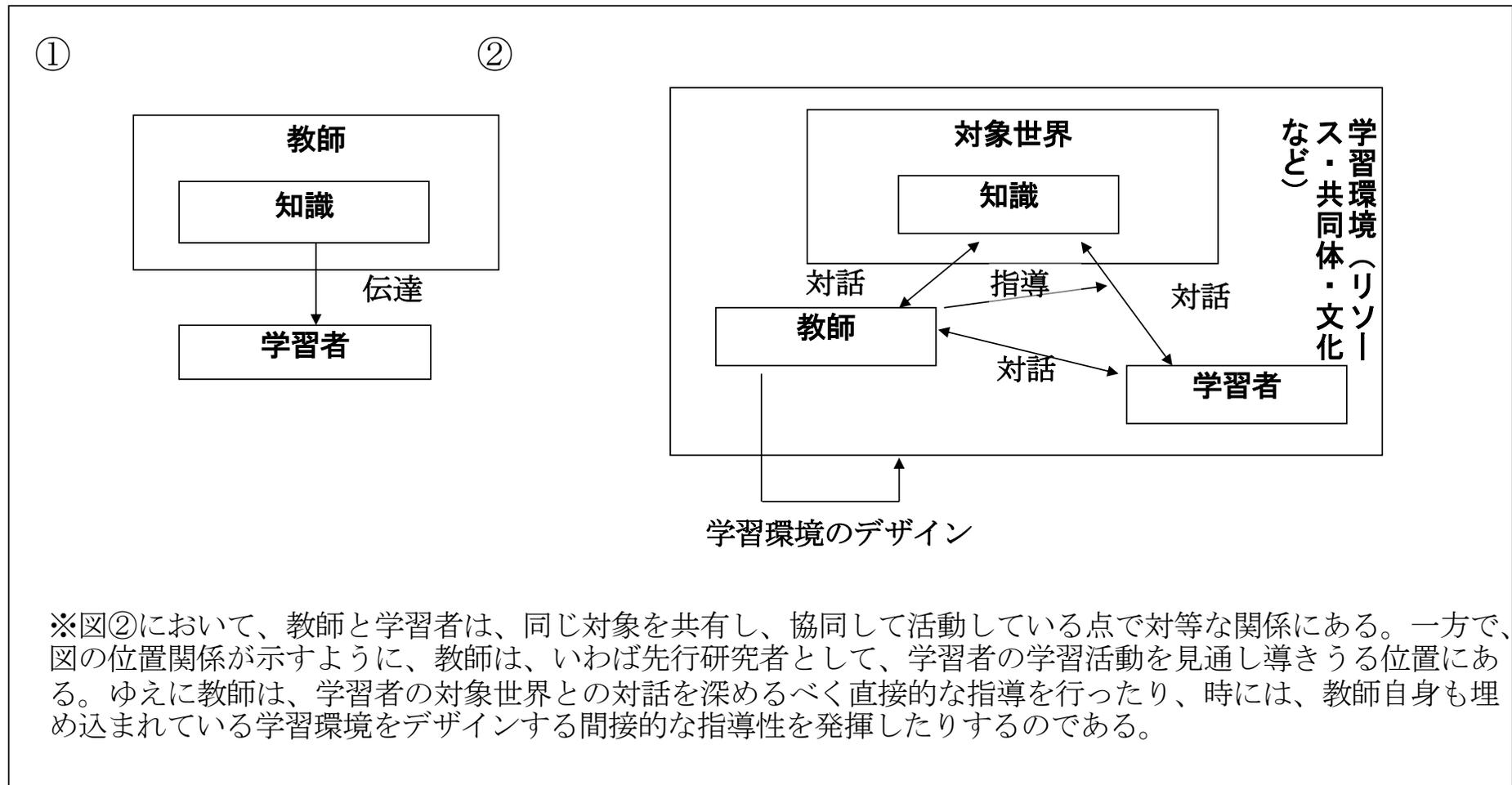
「旧来型の授業」という語りで見落とされているもの

- 日本の伝統的なよい授業のイメージである、クラス全体での創造的な一斉授業は、つまずきを生かしたりしつつ、一人一人の考えをつないだりゆさぶったりして思考を練り上げていく質の高さをめざしてはいるが、子どものつぶやきにアシストされながら、教師が想定する流れや結論を押し付ける授業になりがち。
- 新しい時代のよい授業とみなされがちな学び合いの授業は、学習者が主人公の生き生きとした姿や、アイデアの創発をめざしてはいるが、学びを深める指導もなく、学習のめあてと手順を示して子どもを動かすだけの授業になりがち。
- 「（演習問題を）解く、進める」ことに重きを置く塾的な勉強文化が学校にも影響を与えるようになり、それが「理解すること」や「考える」ことだと生徒たちは誤認し、学校も「立ち止まり」や「回り道」という理解や思考に誘う強みと矜持を見失ってはいないか。

授業をめぐる二項対立図式の落とし穴

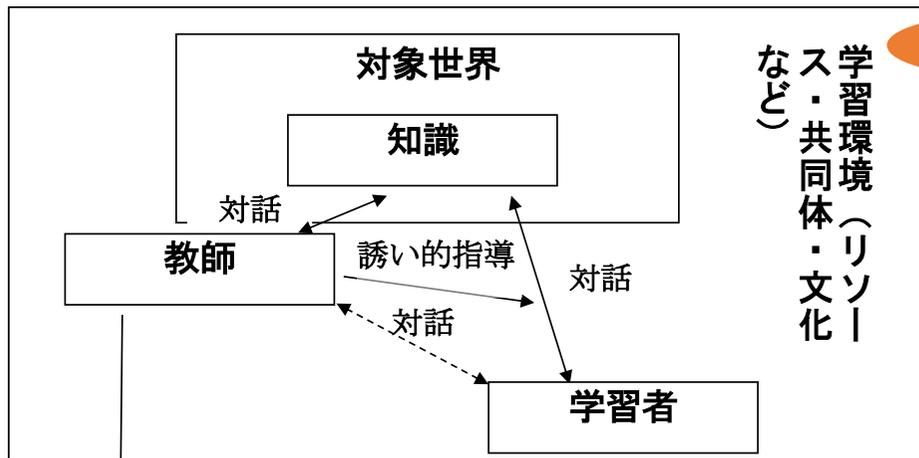
- どれだけ「学び」に光が当たっても、大人の責任を放棄しない限りは、「教えること」に限らず、教師、あるいは子どもの学びと成長を支援する他者の仕事はなくなりはない。「授業から学びへ」という言葉を使っているとしても、教育関係者であれば、教えることや教師の仕事が完全になくなるという意味で使ってはいないだろう。「学び」に光が当たることで、より縁の下の力持ちのような形で教師の指導性は見えにくくなっていくが、しかし確かに存在はしている。
- そうした見えにくくなってしまふ部分にもしっかりと光を当てておかないと、特に教育言説が教育関係者の内輪だけでなく社会全体に開かれたときに、言葉を文字通り受け取って、子どもに任せさえすれば学べるんだ、教師はいらないのではないかといった誤解を生み、それを文字通り実践するような取り組みや改革が生まれかねない。

図. 「真正の学習」における教室の関係構造 (出典: 石井英真『現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2011年、183頁。)

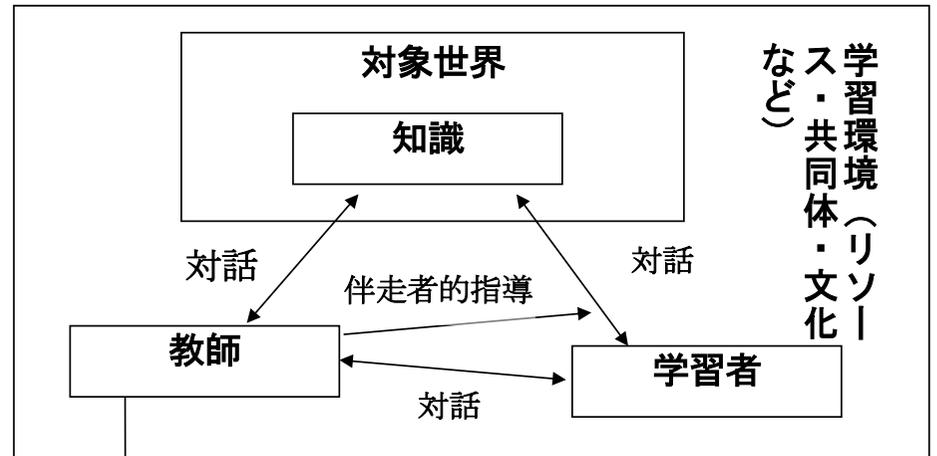


教材を介して教師と子ども、子ども同士が向かい合い、ともに教材に挑む共同注視の関係性を、学びや活動への子どもたちと教師の共同責任の先に、授業や学校の学び超えを

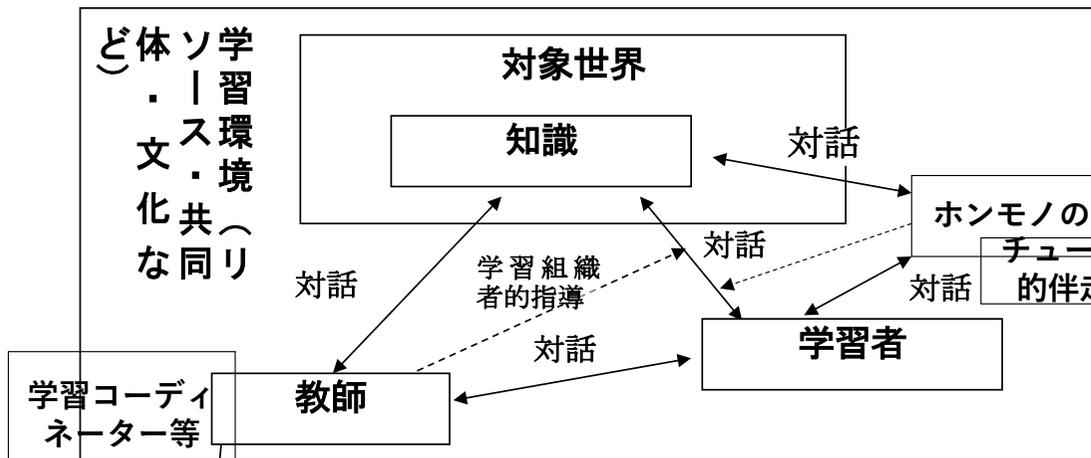
- 教師の仕事は、その教科のうまみを得られる材を、できるだけ本物のナマのそれを考え抜き（教材研究）、材と子どもたちとのいい出会いを組織し（導入）、子どもとともに横並びでその材と対話し、時にはナナメの関係に立ちながら、うまみを感じられる入り口をさりげなく指さし続けることである（発問とゆさぶりによる展開の組織化）。さらに、「まだやめたくない」「じゃあ〇〇はどうなっているのかな」「大人たちがいろいろ言っていた〇〇ってそういうことだったのか」「これって授業で習ったことと関係あるんじゃないか」といった具合に、授業の先に、子どもたちが、授業外、学校外の生活で引っかかりを覚え、立ち止まり、学びや追究を始めるような、生活場面や生きることを豊かにしていくような、そんな子どもたちの姿を願い目指し続けることであろう（**学ぶことへの導入としての授業**）。
- 教材を介して社会や文化のホンモノやその深みへと誘う、**共同注視の関係性**を軸にした、触発的で媒介的な指導性こそ、AIでは実現しえない、子どもたちと日々生活を共にし、子どもたちと学びや生活の物語を共有しうる教師の役割の強みである。それは、ICT活用において、伴走者的でコーチング的な教師の指導性として重視されるものであろう。
- **授業・単元が終わっても学びは終わらない。興味・関心の幅を広げ質を高めて、個性的な学びを触発していく。**さらに、**授業外でも学校生活（総合や特活、あるいは、オンラインのもう一つの教室も含む）を共にしながら、子どもたちの学びの空間を見守り支援すること。** c.f. 日記指導と生活綴方



共同注視



共同責任

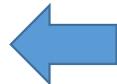


学び超え

学習環境のデザイン

学習環境のデザイン

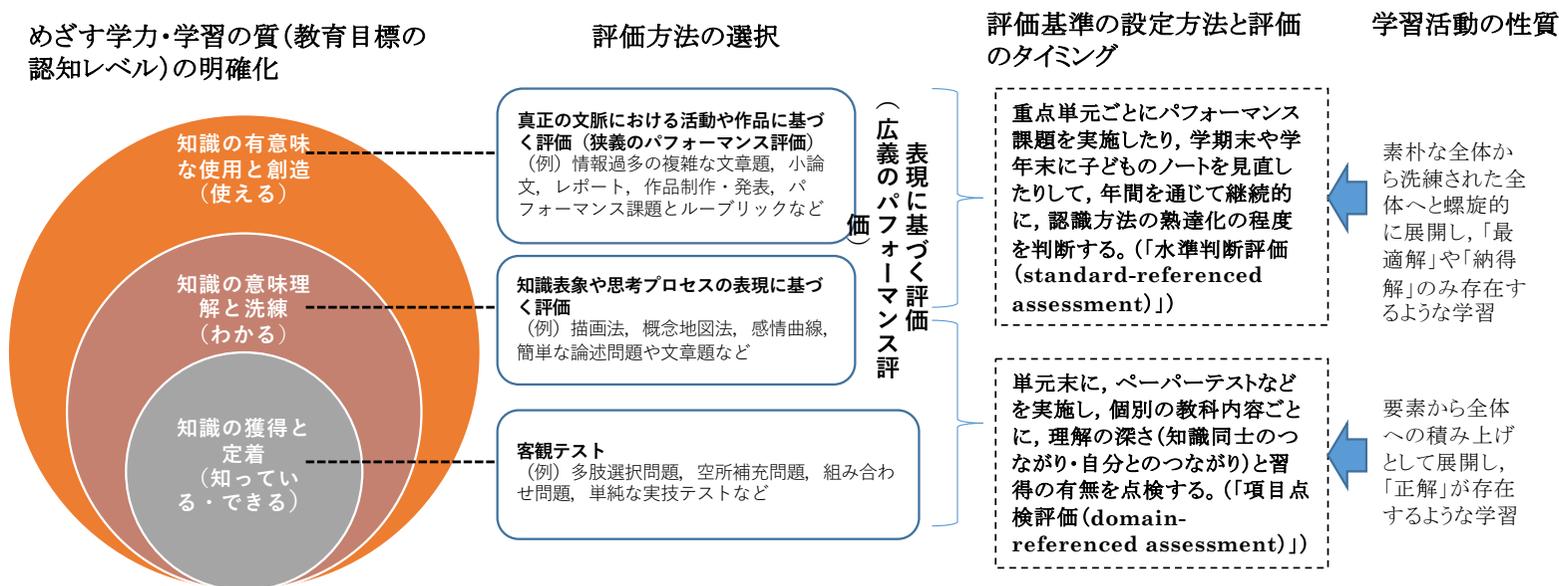
学習環境のデザイン



真正の学び（authentic learning）とは？

- **ドリブルやシュートの練習（ドリル）がうまいからといってバスケットの試合（ゲーム）で上手にプレイできるとは限らない。**ゲームで活躍できるかどうかは、刻々と変化する試合の流れ（本物の状況）の中でチャンスをものにできるかどうかにかかっており、そうした感覚や能力は実際にゲームする中で可視化され、育てられていく。ところが、従来の学校において、子どもたちはドリルばかりして、ゲーム（**学校外や将来の生活で遭遇する本物の活動・学校の出口の先**）を知らずに学校を去ることになってしまっている。**教科の一番おいしいプロセスを子どもたちにゆだねる「教科する（do a subject）」授業へ（質が高くてかつ、深くて重い学び）。**
- 学校や塾などでの「勉強」は、文化を遊ばず、味わわずに、それを筋トレや選別の道具として使っていないか（例：美味しい料理を味わわずに、早食い大食いを強いられているうちに、それが自己目的化してしまう）。**思考の体力づくりは大事だが、筋トレのための筋トレは、受験というゲームで勝ち抜くためだけの学力となり、成長の伸び代をつぶすことになりかねない。大学への入口の個別選抜が出口の採用試験に近づく動きも。**
- 「本物＝実用」ではない。「本物」とは、教育的に（時に嘘くさく）加工される前の、現実のリアルや文化の厚みにふれることを意味する。人が人を変えるのではなく、現実世界や生活や文化が人を育てる。
- わかっているつもりは、現実世界の複雑さから、また、できているつもりは、その文化や領域の追究の厚みからゆさぶられることで、教科の知と学びは血が通ったものになっていく。**学びのピークを人生のヤマ場に。**
- 「**学問のにおい、ホンモノのにおいのする授業**」（子どもたちの目を学問の世界や現実の世の中へと開かせていく）、そうした人間的成長にもつながる人間臭くて質の高い学びをすべての子どもたちに保障したい。

学力・学習の質と評価方法との対応関係



(出典:石井英真「学力向上」篠原清昭編著『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房、2012年。)

「考える力を育てるかどうか」という問い方ではなく、「どのレベルの考える力を育てるのか」という発想で考えていかねばならない。特に、内容の習得をめざす中での思考力と、学んだことをつなぎあわせて文脈に対応して使われる思考力とのレベルの違いを認識しておく必要がある。

c. f. ブルームの目標分類学における、「適用 (application) 」 (特定の解法を適用すればうまく解決できる課題) と「総合 (synthesis) 」 (論文を書いたり、企画書をまとめたりと、これを使えばうまくいくという明確な解法のない課題に対して、学んだ知識を総動員して取り組まねばならない課題) という「問題解決」のレベルの違い。

GIGAスクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点

①：

- ICT活用、修得主義、個別最適化された学び、働き方改革、これらは「学校のスリム化」を招きがち。学校の丸抱え体質は問題だが、捨てるてはいけないものを見極める必要がある（**生活の場としての学校、成長につながる学びの保障**）。
- 「オンライン学習」は、「授業」と「自学」の間の「遠隔学習支援機能」（クラウド上のもう一つの**教室**）の増設問題として捉える。対面とオンラインの「多層的な教室」を前提とした授業や学校生活と表現してもよい。**教室での対面でのコミュニケーション（一つ目の教室）**が難しくなっても、zoom等を使えば顔も見ながら**オンライン同時双方向でやり取りできる（二つ目の教室）**、さらに、それが落ちてしまったとしても、学校HPやGoogleクラスルームなどの**オンラインのプラットフォーム（三つ目の教室）**があれば、課題のやり取りを通して、文通的、通信添削的なやり取りで学びを支援できるし、**共同編集機能**を使えば、顔は見えないけれど、リアルタイムで他の子どもたちとつながりながら一緒に学んでいる感覚を持つこともできる。
- **単元や授業が終わっても、オンラインの教室があれば、さらに学びや追究を続けたい子どもたちでグループを立ち上げて学び続けていくことができる。**そして、時に教師も伴走しながら、**オンラインのもう一つの生活世界（健全な裏サイト）**で子どもたちが自主的に学びを続け、そこでの追究から、授業という対面の公共世界（教育的な舞台）で教師の指導の下で対話し深めていく問いや素材が生まれてくることもあるだろう。**一人一人の日記や学級日誌の中から、クラスの課題が生まれてくるように。**

GIGAスクール構想の元の子校のヨにリ別を向い但 9 悦点

②：

- **オンライン上の教室**は、学校外のSNS上の私的なやり取りの場を、もっとパブリックな形にしたものとも考えることもでき、時にモラルを欠いて傷つけあうことにもなってしまうネット上での私的なコミュニケーションのあり方を、より成熟したものへと組み替えるための練習の場と捉えうる。
- オンラインでも教室に参加しているという状況は、「通学」や「不登校」の観念も変えていくだろう。さらに、**学校という場におけるフレックスな学習の時間**（ドリル的な勉強は授業というよりも寺子屋的にやれる）、**家庭における支援付き自学**（オンラインで仲間や学校や社会とつながりながら自由研究や宿題に取り組む）というオプションを想定すると、子どもたちの自律的で協働的な学びの時間を拡大する手立ても考えられるだろう。
- 「**小さな修得主義**」（知識・技能の習得を軸にした検定試験的なカリキュラム）と「**自習室**」（**個別化**・早修・寺子屋的）の方向性か、「**大きな修得主義**」（知識・技能を総合的に使いこなす挑戦的な課題を軸としたプロジェクト型のカリキュラム）と「**自主ゼミ**」（**個性化**・拡充・大学的）の方向性か。

教育課程の履修原理—履修主義と修得主義

		履修主義・年齢主義	修得主義・課程主義
履修原理		履修主義： 所定の教育課程を、その能力（または心身の状況）に応じて、一定年限の間、履修すればよい。	修得主義： 所定の課程を履修して、目標に関して一定の成果を上げることが求められる。
進級（卒業）原理		年数（年齢）主義（social promotion）： 卒業要件として一定年限の在学を要求し、grade は、「在学年数（学年）」を意味する。	課程主義（merit promotion）： 卒業要件として一定の課程の修了を要求し、grade は、「教材習得の段階（等級）」を意味する。原級留置（留年）もありうる。
学校の中心的な役割		社会性・人格の育成、全面発達（多元的価値）、保護（ケア）・社会的包摂機能 共同体としての生活集団を軸とした機関	知識・技能の獲得、知的発達（一元的価値）、能力向上・水準保障機能 機能的で学習集団を軸とした機関
カリキュラム論上の立場	義務教育制度 成立期	経験主義（子どものニーズに準拠）との親和性 方向目標と相対評価や個人内評価（構造化されていないカリキュラム） 同じ年齢集団で（個々の子どものニーズに合わせて異なる内容や進級基準もありうる）	系統主義（目標・内容に準拠）との親和性 到達目標と目標準拠評価（構造化されたカリキュラム） 同じ内容を（内容の習熟度に合わせて異なる年齢の子どもたちが集まることもありうる）
	現代	系統主義の学力保障と平等化の側面との親和性	経験主義の個性尊重と自由化の側面との親和性

ICTで学びの質を追求するために①

最新テクノロジーで実装して、旧式の学習観に基づく教育（大人数の一斉授業、行動主義的で個人主義的で機械的なドリル学習）を展開することになっていないか。ほどほどのハイテク感がちょうどよい。ペダゴジー・ファースト、テクノロジー・セカンド（pedagogy first, technology second）をこそ実現すべき。

ICT活用については、仕事や作業の効率を上げるための**便利さやスマートさ**を追求することよりも、教育的価値を高める上では、**フラット化**を生かして、**ホンモノの世界**や**研究や活動**のように、より複合的で、**割り切れなさやノイズ**を含んだ学習や活動に**アクセスする機会を拡大する方向性**で実装がなされる必要がある（**真正の学び**（authentic learning）へ）。

ICTでカラフルでアクティブで見栄えのするプロジェクトは組織しやすく、**真正性**を演出できる。「**ハリボテ**」（**ホンモノっぽい活動**）を**まず作って、そこから学びの本番が始まる**（中身の吟味と質の追求につなげ、活用から習得に降りていく）。

→**活動としての成功が学びとしての成功を意味するわけではない**。活動の中に一人一人の**学びや成長を見取る教師や子どもに関わる大人たちの目の重要性**。

表. 学力・学習の質的レベルに対応した課題例、および適合的な教具とメディアの使用法

	教具とメディアの使用法	国語	社会	数学	理科	英語
「知っている・できる」レベル	問題集とドリルプリント AIによる個別最適化学習のためのタブレット	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計器の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りをする。
「わかる」レベル	教科書、黒板とノート、ホワイトボードとワークシート 電子化された教材パッケージ、電子黒板、ノートやホワイトボードやワークシートとしてのタブレット	論説文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテキストの記述から想像する。	扇状地に果樹園が多い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起こるか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適用問題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で説明する。	教科書の本文で書かれている内容を把握し訳す。 設定された場面で、定型的な表現などを使って簡単な会話をする。
「使える」レベル	史・資料、ホンモノの物や人や文献 情報収集・分析・表現やコミュニケーションのツールとしてのタブレット	特定の問題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえながら自分の考えを論説文にまとめる。そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論評する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前はどこに出店すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万本当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題をつくり、追究の過程と結果を数学新聞にまとめる。	クラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けられない。その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読んでポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分担して演じ、発表会を行う。

※同じ機能が果たせるのであれば、より原初的な教具に戻して考えてみる。

テクノロジーを生かしたイノベーションというとき、効率性志向の既存の作業や生活のスマート化のみならず、教科の専門性と結び付けて学びの質を高めたり、社会的活動と結び付けてフラット化や民主化につながりたりする視点も重要だろう。

ICTで学びの質を追求するために②

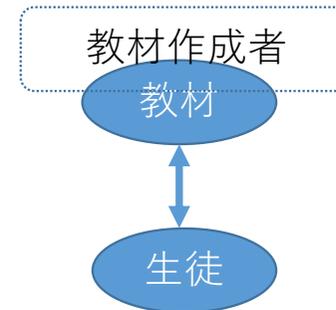
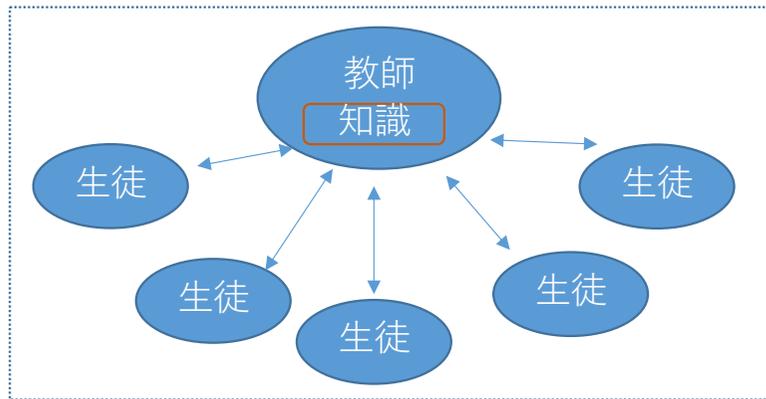
- 「電子黒板、タブレットといった機械が教師の指導や子どもの学習をどうスマートに便利にできるのかということ以上に、デジタルメディアが世界や社会や仕事や生活のあり様や人々の発想にもたらしている革命的な変化のリアル（可能性とリスクの両面）をどう子どもたちに経験させるか、まさに学校の学習の真正性の追求という観点から考えることで、テクノロジーの活用は、効率性、個別性、私事性と結びついた教育の機械化ではなく、学校の学習の文化性、共同性、公共性の再構築につなげることもできるだろう。**消費社会的でプライベートなデジタル環境ではなく、職業人や専門家がアクセスしているような、子どもたちの日常生活ではふれる機会の少ない、知的で文化的でパブリックなデジタル環境をこそ学校において保障し、デジタルメディアとのより成熟した付き合い方を学ぶことが大切である**」（石井英真「『未来の学校』をどう構想するかー『大きな学校』と『小さな学校』の狭間でー」『教育展望』717号、2020年、56頁）。

一人一台端末を生かす視点

- 教師が授業で活用する教具としてよりも、**学習者が日常的に学びにおいて活用する文具**としての意味。**端末の先の膨大なデータやつながりにアクセスすることは、アカウントをもって自分のデータを管理する主体**（デジタル市民）となる第一歩であるし、**教師を学び超えていく可能性**を広げる一方で、**切れすぎる刃物のように、保護膜なくweb上の社会にさらされること**の**リスク**も考えておかねばならない。
 - 「**自治**」の**指導**（つながりや道具を自ら治めること）の重要性（教師による指導的な管理を学習者による自己管理・自治へと発展的に解消させるような足場かけ）
- PCは、日常的には机の上で左上か右上の端を占める程度で、PC以外の文具がおろそかにならないことが肝要。PCが机の真ん中に来る頻度は学校階梯や教科・領域等によって異なる（**状況に応じて文具をスイッチできることが大事**）。タブレットへのタッチペンでの書き込みは、入力はできても、聞き書きなどは手描きのノートの意味があるし、逆に、まとまった文章を作成する（**思いや考えを綴れているとは限らない**）のにタイピングでの文書作成は適している。「書字」の発達的意味も問われる。**PC上で手早く操作していても思考が空転していないかを見極める必要性**。
- **既存の集団やつながりから個を切り離し、関係をつなぎ変える可能性**。

一人一台端末による授業の構造変容の促進へ

- 日本の、特に中等教育における、**学校内外における一方的一斉授業と宿題**（ともに個別主義・自力主義）の構造



- ICTが入ることで、教室での「**教師と学習者の一対一の関係の束**」（**鵜飼の構造**）を強化する（一対一の机間指導の強化）か、逆に、**学びを孤立化させる**（機械的ドリル学習の効率化）か、あるいは、**鵜飼の構造を解きほぐして学び合いを促し、教室の関係に横糸を通せるか**（練り上げ型授業や協働的プロジェクトや個人作業の協同化の促進）。机間指導（見て回る）よりも膝下指導（持ってくる）。**机間指導に子どもたちも参加。**
- 一対一の手厚い個人指導を理想化することの危うさ。**

教材パッケージを使いこなす視点

- **AIドリルはあくまでドリル。**「知っている・できる」レベルの学力は育っても、「わかる」、さらには「使える」レベルの学力は保障できない。それは、ゲーム的な動機づけにより、低学力の子どもたちの学ぶ意欲に火をつけ、家庭学習も含めた学習量の増加につながるかもしれない (c.f. 百マス計算と「見えない学力」論)。**個人指導塾の自習支援機能を代替するもの。**しかし、特に年齢が上がるほど、できるようになったという動機づけでは限界がある。学びの中身やレリバンスを問うことなくしては学びへの動機づけは成熟しないし、継続しない。そして、ゲームせずにドリルばかりではバスケットのパフォーマンスも上がらないのと同様に、教科の学びの質を追求することなくして、内容習得も保障されない。
- **探究的な学びを支援する、さまざまなPBLのプログラムは、一つ一つをイベント的に提供するだけでは、探究が深まるとはいかないし、最初は目新しくて食いつく生徒たちも慣れてくるとモチベーションは下がる。点のプロジェクトを線のストーリーとして深めていくような、学びの履歴に寄り添い、その視野の外部を指さしたりしながら、生徒の学びからカリキュラムを紡いでいく、コーチング的な縁の下の教師の指導性が重要となる。**また、プログラムのコンテンツ以上に、それが**学校外部のチューターとのナナメの関係や、現実社会のリアルな問題と格闘している当事者との協働関係 (with ホンモノ)**を構築することで、**学校的価値観を相対化し、一皮むける経験 (パースペクティブ変容)**の機会が準備される (c.f. 脱エリート主義という探究的な学びの原点の確認)。

「主体的・対話的で深い学び」と 「個別最適な学び」をどう捉えるか①

- **量から質**への重点移行としての「資質・能力」「**主体的・対話的で深い学び**」の追求。**形式的平等から公正**（不利な子どもたちへの手厚さ）への重点移行としての「**個別最適な学び**」の追求。

※**公正で質の高い学び**（学びの質をすべての子どもたちに保障しそれぞれの幸福追求につなげる）

- 「**材**」を介してこそ子どもたちの間に**対話や協働**が生まれ、それを通じて、わかっていたつもりのことやゆさぶられたり、考え方が広がったり理解が深まったりする。さらに、そうした**認識の深まり**の先に、物事への興味・関心や世界に関わろうとする**主体性**が生まれ、自己のあり方の内省も促されるのである。

※**授業づくりの不易の追求の先に「主体的・対話的で深い学び」は実現する。**

- 教科学習としての質を追求することとアクティブ・ラーニングは対立的に捉えられがちだが、**教科本来の魅力の追求の先に結果としてアクティブになる**。教師主導は教師を忖度する授業に、学習者主体は教材に向き合わない授業になりがちである。教師主導でも学習者主体でも、**子どもを引き込み、成長を保障する授業は、教材を介して教師と子ども、子ども同士が向かい合い、ともに教材に挑む関係性になっている**ものである（子どもの成長を追究するところならざるを得ない地点）。

※学習形態にフレックスさのある**練り上げ**、学習課題の質とゆさぶりを伴った**学び合い**

「主体的・対話的で深い学び」と 「個別最適な学び」をどう捉えるか②

- ビッグデータから学ぶAIを生かしたICT×社会におけるニーズの多様化
 - **一人一人**に応じた「**快適な教育**」と「**学習歴社会**」への志向性（授業時間数 ≠ 学習時間数）。
 - 本来的に個性的な子どもたちの多様な背景をふまえながら（**手段としての個別化**）、それぞれの生き方やつながりの幅を広げ、視座を上げ、関心・問題意識・志を育てて、より知的で文化的で公共的な個性へと誘う（**目的としての個性化**）。
 - 授業外、学校外において拡大する多様な学習の場を利用して**自習**できるよう（狭い意味での自律的学習者）、活動に参加しながら**自らの人生を紡いでいける**よう（広い意味での**自律的学習者**）、**学校から巣立たせる**こと。
- ※ 「**個別最適な学び**」 = **一人一人を大事にする支援**
 - × **自律的な生涯学習者につなぐ仕掛けづくり** × **ICT活用**

「授業」論と「受業（日子）」論のめいた（持続可能 で仕事の手ごたえを手放さない授業像の均衡点を探 る）①

- オンライン学習やICT活用において、働き方改革において、授業像が問われている。
- 「**授業**」論は、コミュニケーション過程が前景化（指導言と学級づくりと教師、人の比重が大きい）
＝掛け図的画一的注入（教え込み）と創造的な一斉授業（練り上げ）の間（問答が触媒）
- 「**受業**」論は、課題遂行過程が前景化（課題設計と学習形態と評価、システムの比重が大きい）
＝手習いの自学（個別化）と学び合い（個性化・協働化）の間（プロジェクトが触媒）
- 「学ぶ」とは、子どもと世界との個人的、あるいは、協働的な対話の過程であって、「授業」は、その対話的な相互作用を組織化しながら、子どもたちを文化の世界へと手ほどきする営みである。

まず既存の「授業」像ありきでなく、自学自習の組織化という筋で、学習支援としての「受業」からはじめて「授業」として肉付けし直してみる。等級制から合級（複式学級）を経て学年学級の成立へ、掛け図（注入）と自学（自力）から教授・学習過程としての授業へという歴史を、発生的にたどり直し、授業を捉え直してみる。

「授業」論と「授業（目字）」論のあいだ（持続可能で仕事の手ごたえを手放さない授業像の均衡点を探る）②

自学論的なフレックスな学びの空間と時間の余地を組み込んだ単元設計の類型

- (1) 一斉授業（**教え込み**）＋フレックス（**自習**）＋活用（**適用**）問題→教わって、自習して、適用する授業（基礎と応用の段階論：自分で勉強する力：「知っている・できる」レベル中心）
- (2) 一斉授業（**練り上げ**）＋フレックス（**学び合い**）＋活用（**総合**）問題→わかって、学び合って、総合する授業（学び直し深める：「わかる」レベル中心）
- (3) 共有された大きな問いや課題（**学びの舞台**）×一斉授業（練り上げと協働）×**フレックス（自主トレや自主ゼミ）**→真正でインクルーシブな教科の学び（応用から基礎に降りていく：生活がゆさぶられ世界が広がる＝「使える」レベル中心）
- (4) 各人の探究したい問い（**学び続けへの入口**）×ゼミナール（**対話と問答**）×**フレックス（自主トレや自主ゼミ）**→真正でインクルーシブな教科横断的な学び（切実な論点を自律的に追究する：自己のこだわりや軸や立場が形成される＝メタ認知システム中心）

真正でインクルーシブな学びへ

- 小説のあらすじをつかみ、内容や文体等に着目して分析できることを目標にして、**小説の書評を書くという共通課題**を設定したとして、**対象とする書物の厚みや難度や語彙が子どもによって違ってよいし、同じ空間でみんな同じ形態ではなく、一人で取り組んでもペアで取り組んでもグループで取り組んでもよいし、必ずしも机で学ばなくても教室を飛び出してもよい**という具合に、**概念や課題は共通化しつつも、扱う個別の知識・技能や学習スタイルには自由度を持たせ、学びを個性化することが工夫されてよい**。むしろ、**真正の課題は、学校外の生活や仕事場や市民活動のつながりや空間を模写するものであり、学校的に規律化された一斉授業とは異なる場や関係性やルールを呼び込みうるし、そのように設計するとよい**。
- 体育や美術などの技能教科で、あるいは、総合学習や特別活動や部活動において、**みんなでゲーム（試合や大きな学習課題）に取り組みながらも、必要に応じてゲームから離れて、各自で、あるいはペアやグループで学び合いながら、自分のペースとレベルに合わせてドリル（個別の技能の練習）に取り組んで、またゲームに戻る**という形は自然だろう。少し長い期間をかけて取り組む、**試行錯誤の余地のある大きな課題を軸にしたプロジェクトのような形で、単元レベルで大きな目標を共有することで、個性的で自由度の高い学びと自主ゼミ的な自然な協働が生まれる**。
- 個別の知識・技能の習得状況を、当該単元を超えて一人一人について、継続的に見守りサポートする際に、**ポートフォリオや個別最適化の学習アプリ等を活用することは有効である**。少人数指導という場合、**基礎・基本の確実な定着を主たる目的として、教師が手厚く指導するというモデルは限界がある**。むしろ、**プロジェクト的な大きな課題や問いを軸にした単元をデザインし、そこに協働で取り組み考え抜く経験を組織することを通して、より多くの子どもたちへの基礎・基本の保障を促し、フレックスな時間では、子どもたち同士の学び合いはもちろん、学生ボランティアなどの外部の人的リソースも柔軟に活用することが有効だろう**。

表. 履修主義と修得主義の二項対立を超える学びとカリキュラムのヴィジョン（知育の協働化と徳育の個性化）

伝統的な一斉授業（同調主義）	真正でインクルーシブな学び（個性と協働性）	個別化された自由な学び（自力主義）
履修主義の強調。	履修主義を弾力化して学習権保障の観点から修得主義を位置づける。	修得主義への一元化。
学習の画一化（標準化の中の共通性）。 みんなが同じ内容について同じように学習を進める、 平等主義的一斉学習。 目標の共通化と画一化。	学びの個性化と協働化（多元的個性）。 場や学習課題を同じくしながら個性を尊重する指導の個性化 （differentiation）。 目標の共通化と個性化。	学びの個別化（標準化の中の学習適性）。 能力別クラス編成、場を必ずしも共有しない自由進 度学習。 目標の個別化と序列化。
一斉学習と知識内容の系統カリキュラム。 学年の縛りと処遇の画一性。 カリキュラムの硬直的規制。	プロジェクト学習と概念のスパイラル・カリキュラム。 異学年で同じ概念を拡充的に学ぶことも可能。 カリキュラムの質的弾力化。	プログラム学習と行動目標の直線的系列。 無学年制は早修とのみ結びつく。 カリキュラムの量的規制緩和。
教えられなければ学べない。 子どもにゆだねたり待ったりできずに、一方的に教え てしまい、自ら学んでいく力や意欲を萎えさせる。吹 きこぼれ問題と落ちこぼし問題を抱える。	授業とは学びへの導入である。 つまづきの根本は意味のつまづき、人が教えることでその飛 躍を埋めるために授業があり、わかることで一人で解いてい ける、考えていける。	自習する力を前提としがちである。 その子に合わせてできるものを提示していると、吹 きこぼれ問題は解決できても、できない子は底でつ まり差は開く。
同調圧力で画一化され個々人が尊重されない集団主義 的な関係性。 管理主義や排外主義と結びつきやすい。 学級経営や生活指導などにおける管理的役割を含んだ 公僕的教師。学校の閉鎖性。 学校の肥大化と閉鎖的な学校文化（教育臭さ）。	一人一人のかけがえのなさが尊重される共生空間と、異質性 を含んだ共同体的な関係性。 民主主義と社会的連帯につながりうる。 学習指導を軸に人の成長に関わる専門家としての教師の専門 職性の尊重。社会への参画と連帯に開かれた学校。 学校のシンプル化と人間臭い教育。	一元的な尺度で序列化される空間と、均質的で機能 体的な関係性。 競争主義や社会的分断と結びつきやすい。 学習指導における教師のチューター化。AIへの代替 や民間への外注。 学校のスリム化とスマートな教育。

「変化の激しい時代」に大事にしたいこと

- 「変化が激しくて不確実性が高い」という言葉で思考停止して、未来を見通そうとする努力を大人はやめてはいけない。不確実性が高くても、視野を広げて視座を上げれば、少し先は見通せるし、変化のベクトルは読み解ける。社会への関心とその変化を楽しむ心持ち、何かを生み出し変えていく面白さを育てることが重要。
- 変化やイノベーションの核心は、メタに抽象化する思考であり、断片化せずに境界を超えてつながりを見出すことが重要（一見つながりがないことにも何らかのつながりは見いだせる）。
- 快適な生活、快適な学びに向かいがちなスマート社会においてこそ、ノイズや割り切れなさとの出会い、既存の視野や価値観の外部と向き合う、痛みや不快さも伴った学びが重要（脱分断と人間的成熟）。
- 材に他者とともに向き合い、「考える」を超えて、問いと答えの間を長くしながら「考え抜く」姿、教師や学校外の先達などとの夕テ・ヨコ・ナナメの関係を通して、自分の中に背伸びを促す伴走者を育て、学校や大人たちを「学び超え」ていく姿（能動的な学習者を超えて、真に主体的な、自律的・自治的な学習者へ）。